

---

# 八重山吹

星桜なつき。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

八重山吹

### 【Nコード】

N1173G

### 【作者名】

星桜なつき。

### 【あらすじ】

ある学園で一人の生徒が屋上から落ちた。事故か？自殺か？それとも……。ある少女の心理からこの事件の真相が解き解れていく。思春期の想い。複雑な恋愛模様。そして、山吹の花。一体何があったのか？

## プロローグ「山吹の花」(前書き)

この作品は『ジャンルシャッフル企画』にて、私「現在星桜」が「推理」というジャンルに挑戦するという企画の元に書かれた小説です。また、この作品の中で、同じ企画に参加されている作家様方の名前が出てきますが、全てフィクションです。

## プロローグ「山吹の花」

『花咲きて 実は成らずとも 長き日<sup>け</sup>に 思ほゆるかも 山吹の花』

万葉集

街は、様々な光が瞬いていた。

赤に、黄色に、青に、紫に輝くネオン達。煌びやかに、空までも明るく燈っていた。

この光に包まれていると、そこにいる人々の生命力があふれているのを感じる。

遠くの談笑。車のエンジン音。何処かの店から流れてくる旋律。賑やかで。華やかで。

初めて見る世界なのに、ここがずっと昔からこんな景色を映し出して、彼らを楽しませていたと 私に伝えてきた。

でも。

私に『淋しさ』という気持ちを連れてくるのは、何故？

私の左右をすれ違う、行き行く人々。

目的もなく、ただ歩いている私に好奇の視線を時折感じて

私という一人の人間が、道端に落ちている小石のように見られて。

私も他人なんだ。ここにいる人達にとっては　私も自分に関係の無い人間という物なんだ。

私は、ここでなにをしているのだろう。

深夜でも、こんなに明るくて、人がたくさんいて、賑やかなのに。私は　ひとり。

『こんなところにきてんじゃねえよ』と、街が言ってる。この街に、何を期待して、何を望んでいたか　もう忘れてしまった。

淋しくて心細くて。寒くも無いのに、体が震えてる。私、やっぱり場違いだった。

帰ろう。

私の場所は、ここにもないんだ。ここにいっても何も変わることはないんだ。

そう思ったとき。一人の男の人と目が合った。今までの好奇の視線と違う瞳。

彼の瞳に映ってから、私は　。

## 日常から

「……………時房さんときむらやっ」

私の名を呼ぶ男の声。私のことをこんな風になれなれしく名前で呼ぶ男は彼しかいない。

せつかくの気ままな昼食の時間を台無しにされてしまったようで、半分睨みつけるように彼を見た。

「なんだ。オロチ丸」

「うわ。またその名前でいいですかー。せつかくお隣でご相伴にあずかるうと思っただのに、ひどいですよー」

左手で癖のある短い後ろ髪を掻いて苦笑いを浮かべる、少しよれた紺のスーツを着た青年。

5

「私を名前で呼ぶからだ。オロチ丸」

「つれないなあ……………。そんなオロチ丸なんて言わないでくださいよう。僕は『道端一樹みちばたがすき』という名前がありますのに」

「知ってる」

「知っているのなら、名前で呼んでくださいよー」

「私にも『桜木さくらぎ』という苗字がある。そちらで呼んだら考える」

「いいじゃないですかー。僕、時房さんの名前、好きなのです」

ずつずつしく、私の座っているカウンター席の左側に腰掛ける、道端一樹と名乗るオロチ丸。

店は昼食の時間から少し進んでいるので他の席は空いているというのに。

「時房さん、今日もお蕎麦なんですね」

「うるさいな。蕎麦好きなんだよ」

「はい。知っています。このお店美味しいですしね。あ、僕もざるそばを」

店主が毎度と答えているのを横目に私は蕎麦をすすった。

まったく。のんびりと昼食を食べさせてくれないのかこいつは。

おいしいお蕎麦が台無しだ。

端正な顔立ちをだらしなくにやけさせて、私の方を見つめている。食べづらい。

「……私に、何か用でもあるのか？」

「いえ、お昼を食べようかなと思っていたら、いつものこのお店で時房さんの姿を見たので、来てしまいました」

「刑事がそんな嘘を付いても良いのか？ それにのんびり外食なんて」

「良いじゃないですかー。こんな田舎で事件なんて早々起きませんし、お昼くらいはー」

「そうかそうか。そんなに税金ドロボーと言われたいのか」

「そういわれますと返せる言葉がありませんよう。でも時房さん、背も高くてよく目立ちますし。お店にいらつしやるのがすぐわかります。時房さんと一緒に食事を食べられるの、僕、嬉しいのですよ。だからそんな邪険にしないでくださいよー」

でてきた蕎麦をすすりながら私に話しかけてくる。まったく、ずうずうしいつたらありやしない。一人にさせてくれないのか。

「僕も仕事とあればずくを出しますし」

「ずく、ねえ……」

私は食事を終え、柔らかい香りの蕎麦湯を飲みながら、おいしそうに蕎麦をすすっているオロチ丸を眺めていた。

彼に私が邪険にしているように思われているかもしれないが、私は彼のことを嫌いではなかった。彼に不思議と嫌悪感を覚えない。

こんな風にやんちゃでまだ子供っぽいところがあるけれど、彼は

こんな若さで刑事を務めているほど有能だ。刑事なんて彼の見た目では想像できないけれど。でも、こんなずうずうしさがあるから、そんな仕事ができているのだろうと思う。

オロチ丸というあだ名も、彼が警察署で犬みたいに親しみられているからとかで、先輩刑事につけられたものだとか。確かに、尻尾を振りわんわんと鳴く柴犬のようだ。

こんなことまで知るくらい、彼との付き合いは長いのか。

そういえば、彼と知り合ったのはいつだったろう。そんなことも忘れてしまった。いつのまにかこうして彼が来て、彼の調子で話をしている。

とても、不思議だな。

「そういえば、時房さん。最近中高生、それもとりわけ女の子達に人気のある、『ケータイ小説』って知っています？」

「ケータイ小説？」

オロチ丸も食事を終え、蕎麦湯を飲みながら話題を変えてきた。

ケータイ小説？ 聞き慣れない言葉だ。

「はい。携帯電話でインターネットに接続できること、知っていますよね」

「ああ。よく問題視されているものだな。それは知ってる」

インターネットという言葉は知っている。なにより出会い系サイトとか闇サイトとか聞いた事がある。また、いじめや犯罪等の温床になっているなどのニュースなどをよく目にする。あまり良いイメージがないのは偏見だろうか。

試したことはないが、私の持つ携帯電話もインターネットに接続できるらしい。

「それで、携帯電話からインターネットに接続して、ホームページとかを作り、そこで自身の恋愛模様を私小説風に書いて見せるといって、携帯電話で読める小説のことのようですよ」

そんなものもあるのか。

「それが、どうかしたのか？」

「いやね、最近、僕もそのケータイ小説を読んでみたのですよ。それで、その内容が結構過激でした……」

「過激？」

「そうなんです。中には乙女心ちつくな可愛らしいお話もあるので、人気のあるケータイ小説に至っては……その」

「その、なんだ？」

「あー、えっと……。時房さんには話しづらい……」

照れたように、私から視線をはずした。照れるような柄でもないのに。

「なんだ。話を振っておいて。わからない奴だな」

「あー、それじゃ、今度そのアクセスのサイト、メールしますよ。」

時房さんが読んでもらえるとわかりやすいかと思えます」

「そうか。面白そうだな。と、ちよつとまで」

「はい？」

オロチ丸からのメールを受け取るということは、私のメールアドレスをレスをオロチ丸に教えないといけない。

ということだ。

「メールしますよ、なんて言っつて。本当は私のメールアドレスを知ることが目的なのではないか？」

「ぎくつ。そ、そんなことないですよ」

「ぎくと聞こえたが。まあいいか。減るものじゃないし」

オロチ丸に知られても、たいしたことじゃない、か。

私はかばんから携帯電話を取り出そうとしたとき、妙な旋律がオロチ丸の方から聞こえてきた。

「あ、ちよつと、すいません。電話が」

スーツの内ポケットをまさぐるようにしながらそう言い、オロチ丸は蕎麦屋の入り口に向かっていた。

出した私の携帯電話が所在なく、寂しそうに見えた。

「なんなんだあいつは……」

入り口の外で電話で話をしている影を見ながら、そんな独り言を  
言っていたら。

「時房さん！ 大変です！」

血相を変えて戻ってきた。横のカウンターの椅子に左足をぶつけ  
てよろめいて。

「どうしたんだ。そんなに慌てて」

「おつじよがくいんいてて……。そ、それが、大変なんです！ 時房さんの学校『せい星  
桜女学院』で、生徒が屋上から落ちたそうです！」

「生徒が……。落ちた?!」

## 夜の街で

「君みたいいな女の子が、どうして、一人で、こんな時間のあんなところに居たんだけ？」

この人の口調は怒っていない。ただ、あきれているというニュアンスがあった。

ため息が聞こえる。

街の明かりから少し離れた静かな公園。

街の光が届かないここはどうしてこんなに淋しげなんだろう。

私は入り口の柵に腰を任せ、風で靡く後ろ髪を左手でかきあげた。

「こんなところにいたら、お巡りさんに補導されてしまうぞ。それでも、よかったのか？」

自分の服装を見てみても、あの街には場違いだった。スカートの裾は長くて、グレーの地味なパーカー。そして古くなったスニーカーを履いて。

街で歩いていた女の子と私を比べて、酷く惨めに思えてくる。

本当。私、何しに来てたんだろう。馬鹿みたい。

「恋愛、してみたかったの」

「恋愛？ 君みたいにかわいければ、いつでも出来るだろう。笑顔一つで男性が虜になると思うぞ。それにまだ若いんだし、これからいろんな出会いがあるじゃないか。いつかきつと、すばらしいことがこれから待っているさ。だから、こんなところで、慌ててもしょうがないだろう？」

そう言つと思つた。これからがある、いろんなことが待っている。

そう大人達は言う。

でも、もし、私が、明日にも、何かのことで死んでしまったら、これからなんてないのに。

今、このときを大切にすることが、どうしてだめなんだろう。

「恋愛って、宗教に似てるよね」

「宗教？」

「信じる心を追い求め、生きる道を探して、自分自身を啓蒙して。そんな感じ。でも、ここ日本だと、無宗教　　というか、宗教に節操が無いでしょ？　だから、恋愛によって誰かを信じたいのかも。それは、私も同じ」

「君は、不思議なことを考えているのだな。私にはよくわからない

」

私も自分で何を言っているのか、よくわかってない。

想っていることを言葉にして出してしまうと、意味が違って聞こえてしまう。

だから、嫌なんだ。

「　　けど、君がそんな風に色々考えていること、良いと思う。なんとなく、理解できるところもある。でも、君のそばにいる人の中のかきと誰かが、君のそうしたいろんな道筋を見せてあげられることが出来ると思う。その人たちに頼るんだよ。君はこんなところにいたらいけない」

それでも、思ったことを伝えてきてくれた。

それに　　。

私の思ったこと、なんとなくでも、理解してくれたんだ。

「そっか。ありがとう」

柵から離れて、夜空を見上げた。  
緩やかな風が私の髪をさらっていく。

薄暗い世界で輝く街。

知らない場所に迷い込んで、この人に出逢った。

この街で、何かを探して。でも、自分はこちらでは場違いで。

なんだけ、夢の中の世界に入り込んでしまったようで。

全てが夢の中の出来事のように。  
ぐるぐる。ぐるぐる。世界が回る。

私が、何処か遠くへ落ちていく。

落ちた、その先で、出逢った人。

彼の瞳を見つめた。

ちよつと頼りなさそうな感じはするけれど、言葉を選んで私に答えてくれた。

初めて逢ったこんな姿の私に。

夢の中だから、私の夢だから、何をしてもいいよね。

だから、私、この人にする。

「ねえ。私と、恋愛、してみない？」

「えっ？ 恋愛？」

「うん。そう。私をあなたの彼女にしてみない？ 私、あなたの言うとおりなら、笑顔で男の人を虜に出来るのでしょ？ 私 本気

の恋愛、してみたいの」

「初めて出会った女の子にそんなことを言われるなんて」  
驚いて、困ったという表情を見せた。

「でも、いきなりそんなことを言われても、返答に困る」  
「私じゃ不満？ それとももう彼女とかいるの？」

「彼女はいない。ただ、こんなにかわいい女の子といきなり恋人になるというのは、ちよつと夢物語過ぎる。私にはこの恋は信用できない。実際にあったことなのだろうかと不安になる、ということだろうか」

「それじゃ、どうしたら恋人になってくれる？」

ふう、と一つのため息。腰に当てた手を顎に当てて少し考えた後。

「そうだな。それじゃ、こうするのはどうだ？」

「なに？」

「私は、恋愛って、もしするのなら、ドラマチックな恋をしたいと思う。だから、またいつかどこかで、君と出会えたのなら、運命を感じるだろう。そのときは、君の言う本気な恋愛、私も一緒にしてみたい」

「恋愛は、駆け引き、ね」

「まあ、そういうことだ」

私に慮っているのだろうか。言葉を選んでいるみたいだった。突然こんなことを言う私に警戒しているのかも知れない。

でも、それでも良いと思った。

その方が、私の思う、私を変えられるきっかけになれるかもしれない。

「私の名前は『爽』<sup>ソウ</sup>。あなたの名前を教えてください？」

「私の名前は トウマ」

「トウマ」

不思議と、知っているような名前。何故か心に響く。安心する。

「それじゃ、またいつかどこかで私と出逢えたのなら  
「出逢えたら？」

「そのときは。恋人、ね」

「ああ。そのときはよろしく」

私の夢は、こうして始まった。

## 星桜女学院

せいおうじょがくいん  
星桜女学院。

私の勤めている学校。

カトリック教会のような白い校舎と、ベージュのブラウスに紺のジャンパースカートの制服。その季節には様々な花が咲き乱れ、清廉で清楚なイメージだったこの女学校。

今、そこには、けたたましいサイレンの音が響き、白地に黒い線が入ったたくさんの車と赤く回る光に覆われていた。黒い制服を着た警官が、校舎の前に張られた『KEEP OUT』という文字の入った黄色のテープの前で立ってこちらを見ている。物々しい。門の外では野次馬が集まっていた。

ミステリードラマで見たことのあるような光景がそこにあった。見知った学校に見えない。何かの映画撮影ではないのかと疑った。私がここにはいけないような錯覚さえ覚える。

オロチ丸は黄色いテープの張られた内側に入り、私はその外の校門前で佇んでいた。

日が傾き、白い校舎が赤く染まり始めていた。いつのまにか時計は四時を回っていた。

屋上でも警官の制服を着た人を目にした。どうやら生徒は五階の屋上から、昇降口の西側にある花壇に落ちたようだ。その花壇には花のない山吹はなく、ブルーシートで覆われて見ることが出来なくなっていた。

私達が着いたときには落ちた生徒は救急車で運ばれた後だったらしい。今はまだ現場検証とやらをしているようだった。

黄色いテープの内側にいるオロチ丸から詳しいことを訊こうとし

だが、神妙な顔つきで花壇を見たり、背広を着た数人の年配の刑事らしき人達と話をしていた。会話が出来る雰囲気ではないし、彼の仕事の邪魔はしたくない。今日はもう話すことは出来ないか……。携帯のメールアドレスのこと、結局うやむやになってしまった。

「先生。何があったのですか？」

「誰かが落ちたとか訊きましたけれど、どうなったのですか？」

生徒が恐る恐る私に訊いてくる。表情も不安そのものだ。私も誰が落ちたのかとか、落ちた生徒は大丈夫なのかとか、何も知らないので返答に困った。この学校の生徒であることは間違いなさそうなのだが。学校内にいた先生方に訊いても詳しくは知らされていないらしかった。彼女達に安心させてあげたいとは思うが憶測だけで話しまわるわけにもいかない。

「すまないな、私にも良くわからないんだ。来たらこんな物々しくてな。何かあったらまた連絡が来るはずだ。だから今日はもう帰りなさい」

「でも……」

「君達がここにいっても不安になるだけだから。大丈夫。何かあったらちゃんと話をするから」

「わかりました先生」

「気をつけて。な」

「はい。おやすみなさい」

今日は授業のない土曜日で、しかももう夕方なので、部活動のために開けてあった校舎に残っていた生徒は多くはなかったが、皆不安そうな面持ちで、私を見つけ、問いかけ、私の言うことに素直にしたがって、帰っていく。

でも、一体誰が落ちたのか。どうして、そんなことになったのか。

校舎の屋上は内側に『r』のようになっていて、高さ二メートルほどの細かい網目のフェンスが張られている。フェンスに上ることは無理にすれば出来るかもしれないが、形からして難しいだろう。それから、あのフェンスは昨年張りかえられたばかりで新しく、寄りかかったりするなどしてフェンスが壊れ、落ちてくるようなことはありえない。

それに、生徒が屋上へ出入りするには、先生の引率ないし、許可がなければ屋上へ行かせてもらえない。

屋上には入れず、フェンスを乗り越えなければ落ちることは出来ない。

ということは、何かの事故とは考えにくい。それに、屋上から落ちたということを通つ先に想像するのは、やはり……。

自殺？

誰かが無理やり屋上に上って、フェンスを乗り越え、自殺しようとして飛び降りた……。

私がいるのに、何故そんなことを。

ともかくは、少しの時間が、私に情報をくれるだろう。

落ちた生徒が、無事であれば良いのだが。

私自身も、不安な気持ちでいっぱいだった。

## ため息

「ねえねえ。彼氏とはどうなったのよ？ 最近彼の話しないししない？」

「うざいから別れた」

「えー？ あんなにラブラブだったのに。しつこいくらい彼のこと話してたやん」

「最近さあ。体ばつか求めてきてつまんなかったんだよね。そうそう、昨日駅前でナンパされちゃった。メルアド貰ったし」

「マジで?!」

私の周りの女の子達は、皆何処かで恋の噂をしている。

彼氏が出来たとか。別れたとか。誰々がかつこいいとか、近くの高校の男子生徒に声をかけられたとか。

化粧をして、かわいい服を着て。夜の街に出歩いていると言う。休み時間には、皆楽しそうに笑って、大きな声でそんな話をしてる。

私は、その、どこが楽しいのか、わからなかった。

私も時々『好きなタイプの男性はどんな人？』とか『好きな人とかいる？』とか訊かれることがある。

でも、そんなこと 男の人に興味はないし、考えたこともない。だから私は本当に人を好きになるってこと。恋をするということが、どういふことなのか、わからない。

でも、みんなの話題はそんな話が多い。

私にはついていけないし、おもしろくもない。

そんな話についていけないと、話にまぎることさえ、出来なくていつしか感じていたみんなとの疎外感。

みんなとの距離が離れていつて、いつか私が独りになってしまう。そんな不安さえ感じてきてしまう。

私自身の中にある違和感が、それにも拍車をかけていく。

このままだと、いけないのかな。

自分を変えないといけないのかな。

でも、すぐに自分を変えるなんてこと、できるのかな。

もし。

私も、誰かに恋をしてみたら、何か変われるのかな。

私が変われるのなら、恋とすることをしてみたい。

でも、どうすればいいんだろう。

恋をすると言つこと。

小説の中では、恋愛はいろんなところにあつて、様々なドラマをみせていた。

友達、幼馴染。先輩、後輩、学校の先生。いろいろな出会いから、いろんな出来事があつて。

そうだ。私もどこかの恋愛小説を真似てみたら、私にもその気持ちかわかるかもしれない。

でも、どうやって真似をするのだろう。

男性と話したりすることさえしない私に出逢う機会があるはずもない。

自分を変えるには、まず自分から何かしていかないといけないんだよね。

皆が言う、夜の街に出かけると、良い男性に出会えるのかな。

私も、皆と同じように、できるのかな。

ため息をついても、花壇にあった黄色い花は答えてくれなかった。

## 葬儀

『ありさか  
有坂りさこ』

星桜女学院在校生。二年四組。

成績は優秀で学年で常にトップ。

その容姿も、漆黒の髪は長く、白皙の肌を持ち、その瞳は見つめられただけで、同姓であつても心を奪われてしまいそうなほど、とても美しい少女だった。

花を愛し、季節のうつろいに心躍らせていて。とても優しく静かで、物腰も穏やかで。同級生だけでなく、上級生、下級生にも人氣があり、次期生徒会長に間違いないとも言われていた。

先生達もこの学校の誉れと言い、非の打ち所のない、まるで絵に描いたような少女……。

その彼女が、亡くなった。

遺書などは見つかつていない為、警察では事故の可能性も否定できないが自殺の可能性が高いということだった。次の日の新聞にも小さく記事が載っていた。

彼女のことは、学校での評判などから良く知っている生徒だったが、私自身としても、彼女と会話したことは一度や二度ではなかった。

そのときは、他愛の無い会話……。私の昔のこととか、彼女のしたいこととか。季節の合間に咲く花のこととか……。

私の部屋に来ることも少なくなかった。私に興味があつたのかもしれない。

いろんな方向に思案して、いろんな方向に答えを見つけ出そうとして。私がそれに答えると喜んでいた。

とても優しくて聡明な女の子。私も話をしていて、飽きることがなかった。

そんな彼女が何故……。

そういえば、時折、遠くを見るような瞳で憂いのかかった表情を見せるときがあった。

彼女の心に、何か思うこともあったのだろうか。

……今にして色々思っているけど、彼女はもういない。

葬儀はいつも、参加したくない。それに、こんな亡くなり方をした知っている少女ならなおさらだ。

沈痛な面持ちの両親。

ハンカチで瞳を押さえている生徒。

何で、何だと皆口々に言う。

言葉に出来ない、この、心に残るやるせなさは、消せそうになかった。

「桜木先生。この度は本当に申し訳ありません」

「和藤先生、そんなことを言わないで下さい」

瞳を腫らし、頬がこけ、顔色も良くなかった。りさこの担任の『和藤渚』先生。

今年新任の若い男性の先生だ。初めて持ったクラスでこんなことになってしまうなんて。それに、りさこの第一発見者ともなった和藤先生の表情を見るだけで、心の痛みやそのショックが伝わってくる。

「私が、有坂のこと、もつと気にかけてやれば、わかっただけならいい。こんなことにはならなかったはずなんです。みんな、私の所為なのです……」

「先生。そんなことはありません。気に病まないで下さい」

「ああ……。りさこ……。何故……」

「和藤先生……」

肩を落とし、泣き崩れる。

私はその肩を取って和藤先生を椅子に座らせた。

泣きたいのは私も同じだ。

あの時、私が学校にいれば、こんなことにはならなかったかも知れないのに。

出来たことはないか、してやれたことはないか……。そんなことばかり思い浮かぶ。

事故であって欲しい。でももし、自殺でも、せめて、何がりさに死に追いやってしまったのか、理由が知りたかった。

ふと、あの青年刑事のことを思い出した。

彼は今なにをしているのだろう。何か知っていることはないのだろうか。

自分でも不思議と、この靄を晴らしてくれるのが、彼であることを信じてやまなかった。

## 壁

私の周りのみんなからは、優しく丁寧に接していると思われる。  
る。

私の物腰、容姿、振る舞いなどから、そう思われているのかもしれない。

ただ、私は、臆病なだけ。

何をするにも、人の目を気にしている。

みんなに嫌われたら嫌だとか、今の現実を壊したくないとか。  
そして、皆には丁寧に接しろとか、そのように言われ、躰けられ  
た両親には良いように思われなくて。

そんなことから 周りに丁寧な言葉使いをして。季節に咲く花  
を気にして。

みんなに心配をしているように装ったり。興味の無いことを興味  
あるようなふりをして尋ねてみたり。

勉強だって、ただなんとなくしてただけ。

私は今の自分と言う存在を 演技している。

本当の自分を隠している私を遠くから眺めている。

不満とか、窮屈というものじゃないけれど、心の底にある違和感  
私はそんなに良い人なんかじゃないと思う心との葛藤が、私に  
焦燥感を連れてくる。

みんなに、嘘をついているのじゃないかって。

本当の私は、もっと違う人なんだって。

「あつ！ 爽先輩！」

「あら、こんにちは。高嶺さん」

一年の高嶺沙耶さん。たかねさやショートの髪が彼女の性格を思わせる。

元気で、素直で……。

「は、はいっ！ 爽先輩、私の名前、覚えていて下さっていたのですか！」

有名人にでも会ったように驚いて、笑顔を見せて、はにかんでいた。

「はい。先日の文化祭の催し物で、壇上に立ち、論文を披露していただいた高嶺さんを忘れるはずありませんから。とても素敵でしたよ」

「あ、ありがとうございます！ 名前、覚えていてくださっただけじゃなくて、爽先輩から素敵なんて言われるなんて。ほんと嬉しいです！」

「ありがとうございます。でも私、そんなすごい人ではないですよ。そんなおだてたりしても、だめですよ」

私なんかより、こんなにもあなたの方が素敵に見えるのに。

「そんなことありません。みんなが言います。爽先輩みたいになりたいって。私も。ほんと憧れの先輩なんです！」

「ありがとうございます。高嶺さんも、とても素敵ですよ」

「ありがとうございます！ 私、すごく嬉しいです！」

いつしかこんなふうにみんなに思われていることが切ない。

色々話をしてくれるけれど、どこかに壁を感じる。

友達と呼べるような本当に心を開いて話を出来る人もいなくて。

こうして、どこか私を高いところにいる存在のように見て。

憧れるとか、素敵ですとか言われても。

私はそんな立派な人間ではないのに。

こうなってしまったのは、私の所為なのかな。  
私が変われば、みんな私を見る目が変わるのかな。

でも、変えてしまった私を見ることも 怖い。  
今まで、嘘を付いていたことをみんなに責められそうで 。

どうすれば良いのかな。  
そうだ。

あの先生に、訊いてみよう。

あの先生は、なんだか私に似ているかもしれない。  
私のことを教えてくれる。そんな気がした。

## 刑事の仕事

葬儀が終わって、四日が経った。りさが亡くなって一週間。皆、心の動揺を隠し切れずに、ここに何人もの生徒が話をしに来る。

りさこの先輩、後輩。同学年の生徒。

皆口々にりさが優しくしてくれたとか、気を使ってくれたとか、親身に相談に乗ってくれたとか。そんなことを言っていた。

本当に彼女は……。

理由を伝えたくても話せない、わからないと言う不安に苛まれる。嫌な黒い靄がかかったまま、手を伸ばしても望みに届かない苛立ちが、私の心を包んでいた。

そんな、頃だった。

「桜木先生。お客さまです」

「お客？」

事務員の方から内線電話が入った。

「はい。道端と言う警察の方らしいのですが」

道端？ 警察の方？

まさか。

「ここに、通すこと、できますか？」

「はい。」ご案内します」

この部屋に来た青年は見知った彼の顔ではなかった。

真面目そうな顔つきで、背筋も伸ばし、精悍そのものだった。

「桜木先生。お久しぶりです。突然の訪問で失礼致します」

「オロチ丸?! ……いや、道端さん」

「はい。お忙しい中恐縮ですが、少しばかりお時間、よろしいですか? 桜木先生とお話したいこと、訊きたいことがあります」

刑事の、彼、なのか。

いつも蕎麦屋で見っていた彼の姿とはまるつきり違う雰囲気を出している。

いつもこんな姿で仕事しているのか。別人に見える。

「刑事の仕事に、来たのか? それは、やはり」

「はい。お察しの通り、先日の有坂りさこさんについて、です」

「……私で、よければ」

声もはつきりときびきび伝えてくる。

私も、少しの緊張感を持って、彼を席に誘った。

「桜木先生が彼女のことを気にしていることなど、少しは晴れればと思ひまして」

「何か知っていることを私に教えてくれるのか?」

「はい」

警察手帳のようなものを胸のポケットから取り出し、開いて。

「まず……。このことをお話しするのは心苦しくありますが……」

りさこさんは自殺ということで、警察の方も断定しました」

「やはり、りさこは自殺したと」

「はい。様々な観点からの判断で自殺と言う断定になりました。学校には本日連絡が行っているはずですが」

道端刑事から何処か申し訳ないというような、謝っているような抑揚を感じる。私に慮っているのだろうか。

「事故、ではないのか? 何かの拍子で足を踏み外してしまったのか」

「はい。何らかの原因で屋上から落ちたということでありましたら、まだ、色々と警察も動くのですが、調べた結果、そのようなことは見つかりませんでした」

「そうなのか……。それでは、私から色々疑問に思ったことを訊いてもいいか？」

自殺したと言うが、やはり納得できない。

「はい。どうぞ」

「屋上のフェンスはどうやって乗り越えたりしたんだ？ りさこがそんなことをできるはずがない」

背がある私でさえも、あのフェンスは乗り越えられないだろう。

「はい。屋上のフェンスなのですが、誰かがフェンスの網を切っていた形跡がありました。割と切りやすい細い針金で作られていたようです。女性でもそう苦もなく切れることはきるはずです。形跡は傍目にはわからないように細工されていましたが、そこからフェンスの外に出られることは可能です」

「そうなのか……。それじゃ、屋上は常にカギがかかっていて入れない。どうやってりさこは屋上に行けたんだ？」

「はい。担任の先生、和藤先生からのお話ですが、有坂さんは天文部に所属していて、その部長であることもあり、部活動をする際に屋上に行く為、屋上のカギを有坂さんが預かっていたそうです」

「つまり、一人で屋上に上ることもフェンスを越えることも、できたと言うのだな」

「はい」

それが出来たのは、りさこだけ……。ということか。

「……。あと、それとですね、目撃者が存在しています」

「目撃者？」

「学校に残っていた生徒や先生がいました。昇降口前、グラウンド、校舎内にいた合計三人が目撃者としています。それぞれ別々の視点から全員がりさこさんが一人で屋上に立って、そのまま飛び降りたと証言しています」

「そうなのか……」

「ただ、自殺であった場合、一つだけわからないことがあります」「わからないこと？」

「遺書が無かったのです」

「そう、らしいな」

だからこそ、こうして皆、不安であり、やるせなくあり、こうして話をして。自殺であつたら、何がりさをそうさせたのか……理由を探していたのだ。

「自殺の場合、その多くは遺書を残しています。メモでも、手紙でも、どこかにその痕跡のようなものがあるのですが……。死にたいという思いと生きたいという本能の葛藤が、そうさせるのでしょう」  
道端刑事の雰囲気少し変わり、どこか淡々とした口調で私の目を見ずに話を続ける。

「ですが、彼女の場合、遺書がない。何故死ぬように思ったのか。どうしてそうなってしまったのか。そして遺書が無いということは自殺と納得できない要素が出来ます。確かに、死んでしまったら次が無いわけですから、本人には関係が無いことではありましょう。でも、残された者には、どんな些細なものでも理由が欲しくなる……。違いますか？」

もしかして、彼、怒っているのか？

何故？

「それで、今日桜木先生にお話を伺いに来たの理由の一つが、この有坂さんの遺書探しでした」

「何故私なんだ？ ご両親や担任の先生もいるだろうに」

「はい。すでにお聞きしています。私が桜木先生にお会いしたいと思ったのは、この星桜女学院の養護教諭……すなわち、保健室の先生たる桜木先生が他の生徒とも話さないことなんて無いと思ったからです」

つまり、りさこの学校内でのことを、他の方向からも調べるために、私に訊きに来た、というのが。

少し、道端刑事の言うことに、理由もなく、頭にくる。

「道端さん。それは刑事としての仕事なのか？ それとも、自分の葛藤を晴らすために来たのか？」

私の問いに、思案するようにいつもの癖である頭をかく仕草を見せた。

何故こんなことを思ってしまったのだろう。少しばかりの後悔が芽生えた。

でも彼は、優しげに私を見つめてきた。

「……正直言いますと、そのどちらでもありません。私はそんな崇高な人物ではありません。強いて言えば、残された人……、有坂さんのご両親、学校の先生方。学校の生徒達。そして、桜木先生、あなたのために……、調べたいのです」

「私の……ために？」

「それでは、だめですか？」

何を考えているのだろう。彼の……、男性の考えることなんて、私にはわからない。

「えっと、まず、桜木先生と今お話したことで、確定いたしました」  
「何がだ？」

「有坂さんは、いじめなどの理由で自殺したわけではありません」  
「どうして？」

「決まっています。いじめられていたりする理由があったのなら、桜木先生は私にその話をして調べてくれ。そんなことを言うはずですが、皆悩んでいます。どうして、有坂さんが自殺したのか、と……」

そつだ。

りさこがこうなってしまう前に、なにか普段と変わっていたことがあれば、私も気がついたはずだ。

あまりにも突然で、理由もわからないからこそ、私も苛立っていたんだ。

道端刑事のように。

「すこし、学校での有坂さんのこと、訊いても良いですか？ どんな女の子だったのですか？ よろしければ桜木先生から見た有坂さ

んのことを、お聞かせください」

「わかった。私でよければ、知っている彼女のことを話してみる」

## 保健室。

扉を開けたその先は眩しかった。

白いカーテン、白いベッド。広い窓の光に照らされたこの子たちは、私に心配ないって言ってるようだった。

少しだけ消毒薬のような匂いを感じて、病院を思い出し始める。でも、ここはどうしてなのか私を落ち着かせてくれる。

学校の中なのに、学校じゃないような雰囲気を感じるからなのかな。

辺りを見渡すと、奥の机に座ったあの子たちに負けないほどの白い服を着た人を見つけた。

「先生」

「ん？」

「あの、昇降口横の花壇に咲いている黄色い花は、なんて名前なのですか？」

「黄色い花？ ああ。あの花は『山吹』だよ。綺麗だろう」

「やまぶき？」

「お代官様。山吹色のお菓子でございます。ほう、越後屋。お主もワルよのう。と色にまで出てくる花だよ」

「あはは。先生面白いです」

「昔は良く咲いていた花だが、最近では見なくなってしまったからな。私が植えてみた。山吹は古歌にも好んで詠まれているな。『万葉集』にもいくつもあるし、『太田道灌』の歌等は特に有名だな」

机に向かって背を向けたまま、私の問いに答えてくれたこの人は、保健室の先生。

男の人みたいで名前が、話し方もこんなふうに男の人っぽいけど、優しくとても綺麗な女の人。

背がすごく高くて、体も細くて、スタイルも良い。ストレートの

黒髪が背中までと長く、遠くからでもこの人だつて、すぐわかる。眼鏡はかけているのに凜とした瞳がすごく印象的で、白衣がすごく似合っている。かつこいいとも思う。

こんな人になりたいってみんなの憧れの人。それにこうしていつも気さくに話をしてくれるから、私もこの先生のこととは好きだった。

「爽。今日はどうしたんだ？ 何か悩み事とかあるのか？ それとも、何処か怪我をしたとか、具合が悪いとか？ 大丈夫か？」

保健室の机から私に向いて。何か書いていたボールペンを右手に持って、私を優しい瞳で見つめてくる。ぶっきらぼうな言い方だけど、親身に話してくれてるっていうイントネーションが心地良い。やっぱりよく見てるんだ。心まで見透かされてるみたい。こんな風にされると、笑顔になつてしまう。

「はい。大丈夫です」

「そうか、それはよかった」

みんなとは違う。先生だからかな。

みんなにも、こんなような優しい言い方をしているのかな。

公平に見てくれる。

でも、先生は相手によつて自分を代えるなんてこと、してない。いつもまっすぐで、自分に素直。そんな気がする。

やっぱり、この先生に訊いてみよう。

「先生」

「ん？」

「先生は、私みたいな学生の頃、どんなことをされていたのですか？」

「爽のような頃の私か？ んー、そうだな。好きなことをしていたな」

「好きなこと、ですか？」

「意外かもしれないけれど、私は結構向こう見ずなところがあるからな。将来のこととか、先のこととか考えず、今やりたいと思つたこと、何でもすぐにやってみたかった。今にして思うと、何か夢中になれることを探していた、そんなところだろうか。本を読んだり、映画を見たり。山に登ったり、遠くまで歩いたりもしていたな。結構ずくだしてたぞ。そうだ、その頃、この花を知つたんだつたな。山吹」

「そうなんですか」

「爽も何か興味があること、持っているか？」

「私の、興味、ですか？」

「なんとなく、爽はあの頃の私に似ている感じがしてな。何でも少し知つただけで、全てを悟つた気になつてしまふ。だから、いろんなことに興味がもてなくなる感じだ」

先生の言葉に、どきつとする。

「でも、何も興味が無いというのは、淋しいことでもある。好奇心をなくしたら、世界がつまらなくなるからな」

「ありがとうございます。でも、私、先生に似ているなんて、嬉しいです」

「そうか？ こんな男っぽいやつなのだが」

「そんなことないです。すごく綺麗です。みんなも、私も、すごく憧れています」

「あはは、ありがとうございます。爽に言われると嬉しいな」

先生が言うことは、確かに、私がいつも思っていることだった。

いろんなことに興味は持っても、そのことを少しでも知ると、興味をなくしてしまう。あらゆる事象が、こうすれば、こうなる。みたいな予想がついてしまつて。そうなんだ。やっぱり。という感想しか出てこなくて。

勉強。小説。映画。話題のドラマ。他の女の子達が気にしてるおしやれ。  
。なんだか、全てがうすっぺらいものに感じてきてしまって。いつしか何も興味がわいてこなくなってしまうた。

今ではただ漠然といつもの毎日を過ごしているだけ。

興味があることを、探すこと。

そういえば、私は、何のために生きているのだろう。

私のやりたいことって、なに？

今まで、そんなこと、考えたことも無かった。

それは、きっと、私自身のことにも、興味が無いからなのかも、知れない。

ただただ 周りに流されて。自分という役割を作って。その演技をしている。

それも、自分の将来がどうなるのかってなんとなくわかってしまっ  
ていて。

私ってなに？

まるで、自分という登場人物の映画を見ている気分。

だから、周りからもそう見られてしまっているのかも。

私に、何か興味があること出来れば、それが変わるのかな。

興味があることを、探す。

私がまだ知らないこと。

それは

。

## 沈黙

「……そんな、会話をしたりしたか。まだ色々あったかもしれないが、また思い出したら色々お伝えする」

「ありがとうございます。有坂さんのこと、また別の方向から見る事が出来ました」

私とりさことの間で交わされた会話等を思い出しながら、道端刑事に伝えた。

思えば思うほど、彼女が自殺するとは考えられない。

話を聞いた道端刑事はひとつため息をして、私の方へ真摯な瞳で見つめてきた。

「桜木先生に、言わなければならないことがあります」

「言わなければならないこと？」

「はい。それは、有坂さんの身体についてです。いささかこんな話をするのはためらいがありました……。でも、ですね。警察の方もこの件の理由がありましたので、自殺をしたと判断しました」

「そんな大事なことが」

「はい。ただ、この件に関しましては、有坂さんのご家族以外、公表されていません。口外してはいけないことでありまして」

「そんなことを私に伝えてもいいのか？」

「桜木先生を信用していますから。でも、またこの話をするのは私という男としての理性がありまして……」

「言いたい、が、憚れる、というのだな」

いつものオロチ丸らしい物言いだ。私は少し安心した。

「はい。ですが、桜木先生には知らせておきたいと思いましたので、よろしく願います」

「わかった」

しばらく、考え込むように手帳を見つめていた道端刑事。

沈黙が、気まずい。

やがて、そのままの姿勢で、言葉を絞り込むように道端刑事は話し出した。

「有坂さんを検死した結果……。有坂さんは、妊娠していました」

「えっ？」

今、なんて言った？

りさこが、妊娠、していた……。と？

「妊娠三ヶ月だったそうです。また、もう一つ、これは家族にも知らせていないのですが……」

私は耳を疑う。しかし、道端刑事は話を続けた。

「有坂さんの体内……。に、男性の体液を確認しました」

「えっ?!」

「つまり、有坂さんが自殺する、少なくとも数時間前には、男性と性行為をしていたということになります」

「ちよつとまで。それは本当のことなのか?!」

驚いて、立ち上がり、道端刑事に詰め寄る。

「検死の結果の報告です。間違いありません」

検死……。

病院等で確認された死亡と違い、こうした不自然死のときに必ず行われる司法解剖。死因などを特定し、自殺か他殺か等を調べるた

めに行われるものだ。

したがって、間違いがあつてはいけない。

「つまり、りさこは、誰かの男の人と……。それは」

「はい、強姦……等のものではないと推測されます。彼女の服装に乱れはなく、落ちたとき以外に出来た怪我などは確認されていません。彼女。彼女の服などからも、男性の体液は確認されていません。そしてこれは個人的見解なのですが……。有坂さんのおなかにいた子供の父親と、残されていた体液の男性は、同じ人物なのではないかと……」

「それじゃ、つまり、つまりだ。りさこは誰か男の人と、自殺する直前まで愛し合っていたと、そう言うのか?!」

体が震え、声が大きくなってしまった。

驚き、慄然。

あのりさこが、そんなことをしていただなんて信じられない。

あの純粹で、無垢で、聡明な女の子なはず。

そんなこと、ありえるはずがない。

「どうなんだ! 道端!」

「すみません、これ以上は……」

「一体、相手は、誰なんだ?!」

うなだれたように肩を落としている道端刑事の体をゆすり、返答を待った。

「……わかりません。それに、この有坂さんの自殺に関しましては、警察ではもう動きません」

「どうして? その、相手の男がわかれば、りさこの自殺の理由がわかりそうなのに!」

「自殺として断定されたからです。自殺に、犯罪としての検挙の法廷はないのです。それは、桜木先生もご存知ではありませんでしたか?」

「でも、自殺に追いやった理由が、なにかあるのかもしれないじゃないか！」

「そうですね。桜木先生ならそう言うと思っていました。でも。そうした理由があつたとして、遺書を残さずに自殺した彼女の気持ちは……、きっと」

道端刑事の言葉に、私は次の言葉を失った。

確かに、遺書がなくて自殺したということは、残された人に迷惑をかけたくなかつたからという理由があつたからなのかもしれない。愛した男の人に、迷惑をかけられない。

そう思ったからこそ、遺書を残さなかつた。

りさこは、そこまで考えて……。

「……それでは、すみません。私はこれで失礼致します。またお話を伺いに来るかもしれません。どうぞ、よろしくお願いします」

しばらくの沈黙の後、道端刑事はそう呟いた。

「道端……さん」

「桜木先生。色々すみません。また出直します」

「……道端さん」

「すみません、桜木先生」

去っていく彼の背中を見て、彼も私と同じ気持ちであつたであらうと感じていた。

## 震える指

道端刑事が去った後。私は一人保健室の机でりさこのことを考えていた。

りさこは誰か男の人と愛し合い、その結果……妊娠してしまって、学生であるため、産めるわけにもいかず、墮胎させることも出来ず。

両親や愛し合った彼にも迷惑をかけるわけにも行かず、誰にも話すこと、相談することが出来ず……どうしようもなくなって、自殺した。

それが理由なのか？ 本当に？

確かに、道端刑事の言っていたことも理解できる。この理由でも納得してしまうところがある。

だが、あの聡明な女の子が、そんな短絡的で思慮に欠ける行動をとるはずがない。そんなことで、自分を殺めてしまうなんて。本当はもっと違う理由があるのではないかという違和感が残って仕方がない。

それは何かと自分でも言葉に出来ない形のものなのだが……。りさこの考え、行動に、私の知っているりさこの姿とかけ離れているからか？

それは、何故だ？

何故、何故と思う、心に引っかかることがある？

自分でも知っている中で、わからない、見えていないというところに、答えがあるのか？

もっと、何か……。りさこのことが知りたい。

「……先生。ちょっと、いいですか？」

ふと、声が聞こえた。声のした方に視線を回してみた。  
一人の生徒が立っていた。

「君は、確か一年の高嶺さん」

「先生、私の名前よく覚えていてのですね。驚きました」

「生徒の名前は全員覚えていて。そのくらいしてあげられないと先生と呼ばれる立場ではないだろう？ で、どうしたんだ？」

「はい。有坂先輩のことなのですけれど……」

胸に右手を当て、ややためらうようにそう紡ぎ出した。

普段素直で元気だった高嶺さんも、りさこのことで心を痛めてるのか。

「そうか……。君もりさこのことを」

「はい。それで……。私、見つけてしまったのです」

「みつけたもの？」

「はい。『ケータイ小説』なんです。それも有坂先輩の書いたケータイ小説」

「えっ？ りさこの、ケータイ小説？」

「はい。私が見つけたこの小説、何度読んでも、主人公が有坂先輩なんです。間違いありません」

「まさか」

「この小説の舞台の学校の登場人物も、知っている人たちなんです。先生も、出てきます。私も、居るんです。それも有坂先輩と話した

ことも。だから、このことを先生にも伝えておかないといけないと思ひまして」

「それは、もしかして、そこにりさこの」

「はい。きつと、有坂先輩が書いた、遺書……みたいなものなのかもしれない」

「その、ケータイ小説、教えてくれ」

「はい。ここです」

ケータイ小説。

確か、前に道端刑事……オロチ丸が私に教えようとした、女子中高生に人気のある、携帯電話で読める小説。

そこにりさが書いたものがあつたなんて。

高嶺さんから教えてもらえたケータイ小説。

ここに、りさこの自殺の理由が、あるのだろうか。

震える指を自覚しながら、私はその小説を読んでみた。

## 山吹の花

『山吹』

バラ科の落葉低木。茎は緑色で根元から分れる。春、鮮黄色の五弁花を開く。一重のものは山野に自生し、八重のものは庭園に栽植。

広辞苑第5版

花言葉は『気品』『待ちかねる』

山吹は地下茎でつながっている為、実を実らせることがなく、そのことを詠まれている歌がいくつかある。

『七重八重 花は咲けども 山吹の みのひとつだに なきぞあやしき』 後拾遺和歌集（兼明親王）

『花咲きて 実は成らずとも 長き日<sup>け</sup>に 思ほゆるかも 山吹の花』 万葉集（詠み人知らず）

先生は何故この花を植えたのだろう。

この学校の生徒達に何かのメッセージを伝えたかったのかな。

図書館の机の上に5枚の黄色い花びらが、淋しげに飾られていた。

「実がならないなんて、まるで、私みたい。でも、私、夢を見ることはできたんだ。実を成らせることが出来る 夢なんだよ」

あの夢を見てから数日が過ぎていた。

今までと何も変わりなく。いつも自分に違和感を持っていて。押しつぶされそうな不安が私を包んで。

そこから逃げようと必死で自分を演じてる。

でも、私にも恋をしようとすることができると確信できてそんな毎日は苦痛ではなかった。

ふと、誰も居ないはずのこの図書館に声が聞こえてきた。

「こちらが図書館です」

「これは、結構な蔵書があるんですね」

教頭先生の声と男性の声。

教頭先生が、誰かにこの学校を案内しているみたいだった。

「市内の大学生からもここを利用したいと言う声もありますが」

「でも、あまり利用されていないのですね。生徒の姿が見えない。放課後なんて私はよく利用していたのですが」

「そうですね。最近の女学生は本を読むということをしなくなってきました。携帯電話、インターネット。そういうものに興味がいくのでしょうか。時代も時代なので、今度こちらにパソコンを導入される予定になっています」

「時代ですか。私もそう感じます」

少し遠くから聞こえてくる話し声。

私はその男の人の声に息をのんだ。

まさか、まさか。

勢いよく立ち上がった私に、山吹の花が抗議の声を出した。

「ん？ 誰か居るのか？」

「こんにちは。教頭先生」

声のした方へ歩み寄って。

「君は爽君。一人で図書館で勉強とは。さすがに感心する」

「いいえ。調べ物をしていただけです、先生、こちらの方は？」

教頭先生の肩越しに見える男性。

「ああ。ちょうどよかった。こちらの先生は、君のクラスの担任になる。先生だよ。先生、こちらの生徒は今度受け持つクラス二年四組の『爽』君だ」

「初めまして」

運命と言うには出来すぎていた。

現実には小説よりも奇なりと言うけれど、まさか、こんなことになるなんて。

でも、こんなことが本当にある出来事なんだ。

私の、クラスの担任の新しい先生。

その瞳に、私は吸い込まれていく。  
ぐるぐる、ぐるぐる世界が回って。

また、夢の中に落ちていける。

「トウマ、先生」

あの街で出逢った彼が、そこにいた。

「爽……」

「先生。わたしのこと、覚えてる？」

放課後。教室に残っていた私を見つけ、トウマが来てくれた。  
夕日が彼を赤く染めている。

「まさか、夜の街にいた、あの女の子が、君だったのか？」

私はこくと頷いた。

「トウマとまた出逢えるなんて、私、思ってもみなかった」

「私もだ。爽はこの学校の生徒だったんだ」

「驚いた？」

「ああ」

瞳を夕日の方へそらし、あの夜にみた彼の瞳は見えなかった。

「爽。あのとき見た世界は夢だったんだよ。君は夢を見ていたんだ。  
そして、私も」

「えっ？」

「そのほうが、君にとっては幸せだよ。君は、この学校の誉れとも  
言われている女の子なんだ。こんなところで、今の君をなくしてし

まうのは、だめだよ」

あの時の彼も、本当は遠くの存在に見えていた。けれど、私、この人にするって、決めた。決めていた。だから。

「私はね。今の私が、嫌いなの。誰も私のこと、私の外見しか見ないの。だから、トウマには、私の心　もう一人の私を、知って欲しいの」

「どうして、それが」

「だから、本当はね、恋人のことはいいの。私のこと、少しでも知ってくれるのなら。トウマは私の担任の先生なのでしょ？　受け持ったクラスの生徒の心くらい、知っていてもいいでしょ？」

恋愛小説の受け売りだけ。彼には私がどう写ったのだろう。ふうとあの時と同じため息一つ。そして。

「そうだな。わかった。なるべく、君の事、わかるようにする。それで、いいか？」

「はい。お願いします。先生」

恋愛が、そんな簡単にはじまるはずもないと思う。けれど、きつと私は。

## 天文部

「先生は彼女とかいるんですかー？」

「おいおい、先生をからかうんじゃない」

「でも、先生、優しいし」

トウマと他の生徒。休み時間には彼の周りに何人かの生徒が話しかけてきていた。

私は遠くからそんな姿を見ているだけだった。

ここでの私は、いつもの私。

人の目を気にして、物腰に気をつけて 。  
そんなことが、もう嫌になる。

あの女の子のように彼といろんなことを話してみたい。

彼に、私のことをもっと知ってもらいたい。

その為には、彼ともっと会える機会をつくらないと、いけない。

でも、彼は先生。

時折、少しばかりの話をすることはあったけれど、どこかに壁を感じていて。

立場上、一人の生徒とだけずっと話をするなんて、できないと、思う。

私から、何か行動をおこさないとだめなんだよね。

「天文部の顧問？」

「はい。私の参加している部活動です。顧問の先生になっていただ

けたら嬉しいのですが」

職員室。

いつもの演技をしている私で、先生の彼に話しかけた。

「顧問の先生は、いないのか？」

「実は、新しい部活動で、私しか部員が居ないのです。それで、まず、顧問の先生を決めておかないと思ひまして。そうしないと部員も集まらなくて。先生、どこかの部活の顧問の先生をさえているのですか？」

「いや、私はまだ赴任して1ヶ月少しだから。部活動はまだだ」

「それならお願いできますか？」

「そうだな。顧問、引き受けよう」

「はい。よろしくお願いします」

天文部。

それは、私が、どうしたら彼と二人だけでいられる時間ができるか思案した結果だった。

この学校の屋上は何故か閉鎖されていて、入ることが出来ない。特別の理由がないと許可も下りないし、許可が下りたとしても生徒だけでは屋上に行くことが出来ない。

先生方に訊いても詳しい理由は教えてくれなかった。

この学校の辺りはこの女学院より高い建物がなくて、屋上に上がって辺りを見渡すことを想像すると、とても見晴らしがよくて心地よい世界があると思えるのに。

恋人と綺麗な景色のところ二人きりになりたい。

そんな想いが恋愛物語の中で語られていた。

誰にも憚れず、誰にも邪魔されず、誰も来ない場所。

そして、とても綺麗だと思える場所。

私も、彼とそこへ行きたい。

そんな場所が、この学校にあった。

どうしたらそこへ彼と行ける？

屋上に行く目的はどうしたらいい？

空を見たいという理由。

それが学生にとって正当な理由であれば。

天体観測。

でも、それだけであれば学校の屋上じゃなくても、出来る。

先生方に屋上に行かせてもらえる納得できる理由がもう一つ欲しかった。

先生の許可と引率。

彼なら、問題ないはず。

私から、何か行動を始めたのは、もしかしたらこれが初めてかもしれない。

自分でしたことだけ。

何故か、心に違和感が残って仕方がなかった。

## 攫んだ、風船

屋上。

扉を開けると、風が頬を掠めていく。

遠くの山が、街が、新しい景色が私を包みこんだ。

「私、屋上にきたの初めてです」

「いい景色だな。この辺りには高い建物は他にはないようだし。でもどうして立ち入り禁止なんだろうな。フェンスも綺麗になっているし」

「昔、ここから落ちた生徒とかいるのかも」

「そうなのか？」

「知らないです」

フェンスにつかまる。

かしゃんと音を立て、私を遮る。

空を見渡して。

下を見た。

校舎から出てゆく生徒達。

遠くで聞こえる運動部の声。

真下には、あの山吹の花壇が見えた。

「爽」

フェンスを背中にして、彼を見た。

私の髪が頬をくすぐる。

左手で髪をかき上げながら視線を彼からはずして。

「君は、とても不思議だな」

「不思議？」

「君と、先生と生徒の関係で1ヶ月。君を見ていて、初めて出会ったときの君が本当に夢であったのかと思うほど。普段の君からは想像できない。だからとても不思議に思った」

私の、外見だけを、見てたんだ。

「ねえ。ここだけでも、先生のこと、トウマって呼んでもいい？」

「えっ？」

「ここなら、誰も居ないし、誰も来ない。だから、私と話をして。そして、またあの瞳で、私を見て欲しい」

彼を見た。

瞳を細めて、何処か遠くを見ている。

困ったような、切なそうな瞳。

「どうして、私にそこまで」

「トウマは、私のこと知ってくれそうな気がしたから。かな」

まるで私の次の言葉を待っているみたいで、何も言わず、ただ私を見つめている。

私はまた、フェンスの外を見て。

遠くにあの街が見えた。

「あの街で、初めて、トウマに会ったのよね」

「そう。だな」

「あの夜の街で、一人でいた私に、『どうしたんだ？ 何か困ったことでもあったのかい？ 私でよければ話を訊くよ』そう言っ  
て私を見てくれた」

「……」

「そして、私はこう答えて」

『私のこと、見てくれたの？』

「トウマは」

『こんなところにいたらだめだよ。公園に行こう』  
『どうして？』

『この街は 君のいる場所じゃない。そう思ったんだ』

『でも』

『私を信用できないのなら逃げてもいい。ただ 。私は君をほ  
つておけなくなった』

「そうして、私の話を訊いてくれたんだよね」

「ああ」

「あのとときのトウマの瞳は本当に私を見てくれた。外見の私じゃな  
くて、本当の私を。だから」

「……」

くるりとトウマのほうに振り向いて。精一杯の笑顔を作った。

「そうか。わかった。君がそこまで言ってくれるのなら。私も、素直になる」

私に、瞳を向けた。

すごく優しくそうな瞳で私を見てる。

あの時見た　瞳。

「初めて見たときから　本当は、君に心を奪われていた」

数歩前に出て。彼の傍に近づいた。

「でも、怖かった。爽と言う女の子のこと、大切にしたいくて。私なんか。君に好意を向けたらだめだって　思ってた」

「そんなこと」

「でも」

「私より、年上なのに」

「だからさ」

「私、色々考えているんだよ。こんなにも、あなたのこと想っているのに。馬鹿みたいでしょ」

「私は。君に、恋しても、いいのか？　君はまるで」

「いいよ」

貯水塔の影。

その壁に私は寄りかかって。

彼から、視線をはずした。

彼が私の首筋にそっと触れてくる。

触れた手が、私の顎をくいっと持ち上げて　。

暖かく柔らかい感触が、私の唇を塞いだ。

やがて、唇が自由になって。彼の瞳が目の前にあった。

「ゴメン。俺」

手元から離れて遠くに飛んでいってしまいそうな風船を、逃がさないようにと、手を伸ばして引き寄せる。

私の仕草は、多分、それと同じだった。

彼の髪を梳かすようにそっと抱き寄せて。

私から、彼を。

どうしてなのか、わからなかった。

そんなこと、するつもりなかったのに、体が何かに弾かれるように、ぴくんと、動いていた。

彼をぎゅっと抱きしめて。

彼の唇を感じて　。

気がついたら、私は彼のすべてを受け止めていた。

彼から、訪れた痛み。

とくん、とくんと感じる彼の鼓動。

私の中で感じて　。

私も、女の子だったんだ。

「爽……」

「トウマ」

彼と、結ばれても、何故か　。  
空虚に思う私がいた。

## ケータイ小説

私はふうとひとつため息をして、携帯電話を机に置いた。

辺りが静かなことを思い出して、心細さを感じた。

まるで、洞窟の中で何か大きなものに追われているような悪寒さえ覚える。

私の携帯に映る文字。

小説『山吹の花』。

夜の街に出歩いていた主人公の女の子、『爽』。

そこで一人の男性『トウマ』と出逢う。

彼女の想いは、自分の心にあつた、違和感を無くそうとしようと、恋を試みたいと願ったことから始まって。

学校で再び出逢った二人は恋に落ち、互いに互いを求めていき…。

でも、彼と彼女の関係から、夢が覚めたように現実に引き戻されていく。

そして、その現実を見つめた主人公は……。

そんな出来事が赤裸々に書かれていた。まるで、実際に起こった出来事をまとめたように。

この話は、間違いない。

この主人公の『爽』という女の子は、『有坂りさこ』だ。

りさこに起こった出来事。そして、彼女の心の中が鮮明に書かれているんだ。

そして、この『トウマ』と呼ばれている男性……。

彼に伝えなければ。

『警察ではもう動きません』といていた彼。彼はきっと一人でりさこのこと、調べていた筈。

彼なら。

「道端刑事。今日は呼び出せたりしてすみません」

「いいえ。桜木先生からのお話があると言われましたらどこへでもお伺いします」

あれから少し時間がたって、彼の中でもすこし落ち着きが出てきたのだろうか。

私が何も言わないのに、この前座った椅子に腰掛けた。

以前の蕎麦屋で会っていた彼に戻ってきている気がした。

「すまない。わざわざ来てもらったのは、ケータイ小説のことなんだ」

「ケータイ小説？」

「この前、蕎麦屋でケータイ小説の話をしてくれただろう？ それで、そのケータイ小説の中で、りさこが書いたものがあつたんだ」

「そんな」

「携帯電話、出せるか？」

「あ。はい。こちらです」

私は彼の携帯電話のメールアドレスを教えてもらい、彼にそのケータイ小説のアドレスを送った。

「今送った『山吹の花』というケータイ小説なんだ。この小説が好きな」

「あつ。このケータイ小説、私も読んだことがあります」

「えっ？」

「あのとき、時房さんに教えようとしたケータイ小説の一つでもありました。中で時房さんと同じような人が出てきたので、気になっていました。まさか、これが……」

携帯を握り締め、そうつぶやく。

「そうだったのか。それならば話が早い。ここに書かれている出来事、それはきつとりさこに起こっていた出来事なんだ。ここから調べれば、りさこの自殺の理由がわかるかもしれない」

「ですが……」

ふと、道端刑事は、真面目そうな顔つきに戻って私を見つめてきた。

「この、ケータイ小説が、有坂さんが書いたものであったのなら、桜木先生が言うとおり、それは遺書になりうるかもしれません。ですが……」

道端刑事は語尾を詰まらせ、眉間にしわを寄せて思案しているような瞳になり、再び携帯に視線を落とした。

「有坂さんは携帯電話を持っていなかったんです。また、自宅にパソコン等もなく。つまり有坂さんはインターネットに接続できる方法がないのです」

「えっ？」

「ですから、有坂さんがこのケータイ小説をここに掲載することができないのです」

「つまり……、りさこの書いたものじゃないと？」

「はい。確かに、ここに出てくる『爽』という女の子は、『有坂りさこ』さんかもしれません。符合する点が多いです。ですが、有坂さんには出来ないのです」

「でも、この中に出てくる保健室の先生との会話……。私とりさこが話していた内容と同じなんだ。間違いない。りさここと私しか知りえない会話なんだ」

「それは、誰かが創作して書かれたとか……」

「でも、この感性は、あの子以外に考えられない……」

りさこが書いたものじゃない。

でも、あの心の葛藤を書ける人がりさこ本人でないはずがない。

一体、どうということ、なんだろう。

「確かに、このケータイ小説に書かれている心の情景は本人でないと描けないものでしょう。なので私も興味を持ったのですけれど。私も最初は疑いました。でも、有坂さんが書けないということ……。でも、最後まで書かれていなくて、有坂さんが亡くなってしまった後更新されていませんけれども……」

道端刑事は携帯電話を見つめながら呟く。

「何かこのケータイ小説とりさこを繋げる手がかりみたいなものはないか？」

「そうですね……。このケータイ小説のあるホームページの管理者からIPを調べてもらい、そこから誰が書いたかわかるようにすることが出来ますが……」

どこか鷹揚を欠いた自信のない口調でそう言った。出来るけど、出来ない。そんなニュアンスがあった。

そうか、もしかしたらこうしたことは事件性がないと警察でも調べたりすることができないのかもしれない。

「無理、なのか？」

「……あれ？」

「どうしたんだ？」

「時房さん。このケータイ小説に感想を述べている人がいます」

「感想？」

「はい。『DARKNESS』という方のようです。えっと、内容は……。」

『小説、上手く書いていますね。ですが、私が思うに、少しばかりリアリテイが足りないような気がします。それは何故かはまだわかりませんが、でも、面白かったのは確かです。また私自身でわかりましたら感想書かせて頂きます』

とあります」

「リアリテイがない？」

「そういえば、この小説は他のケータイ小説とはちょっと違う感じを受けました」

「どんな？」

「すみません。私もあまり文学とかは疎くて……何故かはわかりません。個性の問題なのだろうと思っています」

「その、DARK………なんとかいう人と直に話したりすることは出来なないか？」

「ちょっと難しいですね。インターネットですと、その先で誰が何をしているかまではわかりませんですし」

「そうか……」

「でも、インターネットで話をする事は、できます」

「話を、すること？」

「チャットというのを使うのです」

「チャット？」

道端刑事の言うことが、よくわからない。

「はい。ちょうどこのケータイ小説のホームページにチャットがあるんです。チャットと言うのはインターネットを経由して集まった人たちが会話できる広場、という感じでしょうか。そこではきつとこの小説を読んだ人たちが集まっているかもしれません。感想を書いた人だけではなく、他の人もどのような感想を持ったか話が出るかもしれません」  
なるほど。

「そこにいけるか？」

「はい。いけます。えっと……、ここですね。あ、今、誰かいるようです」

「会話、できるのか？」

「はい。ちよつと入ってみますね」

道端刑事は忙しく携帯電話のボタンを押して文字を打っているようだった。

私は道端刑事の後ろに回り、携帯電話の画面を見てみた。

## チャット

\*チャット\*

【入室者：2名】

メッセージ

オロチ丸

こんにちは

道端刑事の携帯に『オロチ丸』と『こんにちは』と書かれた文字が見えた。

「オロチ丸？」

「はい」

携帯から目を離し、道端刑事を見る。

小さな携帯画面を見ていたので、すぐ隣に道端刑事の顔があつて少し驚いた。

「なんだそれは」

「私の名前ですよ」

「それは知ってる。でも、ここにオロチ丸と書いてあるじゃないか」

「ああ、これはチャットでの名前です」

「そんなあだ名を名乗ってもいいの？」

「これはハンドルネームなのですよ。本名でもいいのですけれど、やっぱり仮想世界に入るからには本名では違和感があるのです」

「そうか。なるほど……」

「他にすぐ思いつく名前がありませんでしたから」

「そうだな。オロチ丸という名前があつてよかったな」

「ちょっと不本意ですけど……」

それで、あのケータイ小説の中では、架空の『爽』という名前や『トウマ』という名前を使っていたのか。

再び道端刑事の携帯に見線を見落とした。

オロチ丸

こんにちは

DARKNESS

こんにちは

携帯の画面に知らない文字と『こんにちは』という文字が入ってきた。

「レスポンスがありました。D……という人がいますね。そういえばこの人」

「そうだ、あの感想を」

「はい。あのケータイ小説に感想を書いた人です！ これはチャンスかも」

「どうしてそう思ったか、訊けるか？」

「やってみます」

私は携帯の画面に釘付けになった。

.....

DARKNESS

こんにちは

オロチ丸

初めましてDARKNESSさん。オロチ丸と言います。よろしく  
お願いします。

DARKNESS

こちらこそ初めまして。よろしくお願いします。

真剣な眼差しをしながらたどたどしく右手の人差し指で携帯電話  
のボタンを押している道端刑事。

なんだかほほえましく思ってしまった。

彼も携帯でこうしたことに慣れていないのか。

オロチ丸

いきなりですけど、DARKNESSさんって、『山吹の花』と  
いう小説に感想を書いた方ですか？

DARKNESS

よくご存知ですね。あの話、好きなのですか？

オロチ丸

ちよっと有名なようで、読んでみたのですよ。あの感想、どうして

そう思われたのですか？

「上手いな。ちょっと見直した」

「あ、ありがとうございます」

チャットとはこうして会話をするものなのか。

文字だけが返答があつて相手がそこに居るといつリアリティを感じる。

DARKNESS

ああ、あのリアリティがないって話ですか。

オロチ丸

そうですね！ 実は私もそんな感想を持ったものでして。

DARKNESS

なるほど。実はですね、あの感想を書いてからしばらくして思ったのですよ。

オロチ丸

何かわかったのですか？

DARKNESS

あのケータイ小説、ちょっと雰囲気が違う文体でしたから。

オロチ丸

雰囲気が違う文体ってなんですか？

DARKNESS

そうですね。どちらかと言うと、作者さんは、本にした小説を書いたことのあるような人だと思いました。ほら、あの小説、他のケータイ小説とは違って、携帯で書いたような感じがしないでしょう？

オロチ丸

えっと、文体について詳しく教えていただけませんか？

DARKNESS

なんだかオロチ丸さんって刑事さんみたいな話し方ですね。

オロチ丸

あ、すみません。

DARKNESS

可愛いんですね。

「私もそう思った。よく見ているな、この人」

「ええっ。そんな」

文に書かれることでもなんとなく道端刑事……オロチ丸が話しているように聞こえてくるようだった。

DARKNESS

ごめんなさい。冗談が過ぎました。えっとですね。文体についてなのですが。

オロチ丸

はい。

DARKNESS

ケータイ小説の文体は横書きのため、また携帯で読むために見やすくするため、行間をたくさん空けたりします。また多くは地の文とかがあまり詳しく書かれていないことが多いのです。

でも、この作品は通常の小説……、縦書きで読ませるために書いたようなのです。

文頭にスペースを空けたりさえしています。

つまり、本……紙で書いた小説をそのままそこに掲載したのではないかな、と。

オロチ丸

なるほど。よく見てらっしゃいますね。あ、すみません。このあたりで私は落ちることにします。お話できて楽しかったです。またよろしく願いますね。

DARKNESS

お疲れ様でしたくオロチ丸さん  
またお話してくださいね。

オロチ丸

ありがとうございます。それでは。おつかれさまでした。

「紙に書いた小説をそのまま掲載した……ですか」  
確かに、そう言われるとそんな感じな小説だった。  
「つまり、りさこが書いた小説を、誰かが掲載したと」  
そうであったのなら、携帯などを使えないりさこの書いた小説を  
インターネットに掲載することができる。  
でもそれは、誰が、何のために？

「時房さん……」

私は今どんな表情をしていたのだろう。

オロチ丸は私を見上げ、不安そうな表情を見せている。

一人の心当たり。

りさこと最も近いところにいた男性。

『和藤渚』わとうなぎさ先生。

りさこの元の担任の先生は産休から休職となり、りさこが二年生の初夏になる頃、今の和藤先生に代わった。

和藤先生はりさこの部活動である天文部の顧問。

このケータイ小説に出てくる『トウマ』という男性と、一致する。

それなら、この話を知っていると思われる人は、この人しかないな  
い。

「オロチ丸……。いや、道端刑事。一つお願いがある」

「はい。なんでしょう」

「私と一緒に、和藤先生に会いに行ってくださいませんか」

## 和藤先生

『和藤渚』先生。

私も特別な接点があったわけではなかった。挨拶くらいしか話をしたことが無い。

さらさらの短い黒髪。身長は私と同じくらい。精悍で、さわやかな笑顔を生徒に向けていた。

女学院には珍しく若い新任の先生ということだったが、生徒に対して、真面目に、真摯に教えて。この学校に来る前は夜の街に歩いて、そこにいた高校生くらいな少年少女を説得したりもしていたという。

優しい、先生というのが、生徒の評判だった。

「……私も、和藤先生には色々とお話をお伺いしていたのですが」

申し訳ないような表情で俯く道端刑事。

多分、和藤先生も何も知らないのだろう。りさこが何故自殺したのかが。

だから、ここにいるのだろう。

「和藤先生」

「……桜木先生」

点滴の音が聞こえそうなほど静かな病室。

りさこの葬儀の後、休職していた和藤先生は酷くやつれて、ベッドに横たわっていた。

何度か自殺未遂をしたという。手首の包帯も痛々しい。

私の問いに何も答えず、ただ天井を焦点の合わない目で見つめていた。

「和藤先生。私にはわからないことがひとつありまして、それを訊きに来ました」

「……はい」

「何故、りさこが書いた小説を他の人に見せるようなことをしたのですか？」

「……知っていましたか」

瞳だけこちらに向けて、か細い声でそう答えた。

この瞳を、りさこは見ていたのか。

「りさこのケータイ小説を読みました。あの小説をあそこに掲載したのは、あなたですね」

「……はい」

「何故？」

和藤先生は再び天井に瞳を向けた。

薄い唇をかすかに開けて、消え入りそうな声で話し始めた。

「……最初は、りさこに、何か興味のあることを持って欲しかった。

だから、一つの道標として小説を書いてみないかと伝えただ」

「君は何かやりたいこと、ないのか？」

「私の、やりたいこと？」

「うん。君を知っていくうちに、どこか作られているもののような感覚を覚えたんだ」

「私は作り物じゃないでしょ」

「それはそうだが。でも、女の子は神秘的なところがあるけれど、君はとても聡明で、不思議で。それは何故かって思っていたんだ。君はきつと、君でも知らない君の心があるんじゃないかって思ったんだ」

「私の、私自身でも、知らないこと？ そんなこと ない」

「もし、言葉に出来ない思いがあるのなら、ひとつ面白いことをしてみないか？」

「おもしろいこと？」

「小説とか、書いてみないか？ 文学とか文芸とかそんな難しいことを考えなくてもいい。想ったことを綴るだけでいい。言葉に出来ない思いがあれば、感じさせればいい」

「感じさせる？」

「君には、それが出来ると想う」

「そこで、書いて持ってきた小説を、私はあそこに入れて、どんな反響が来るか知りたかった。彼女を知りたかったんだ。りさこの考えていること。やりたいこと……。全てを。私を感じ得なかったことでも、誰かが悟ってくれると信じて」

和藤先生の、想いが、私にもわかる。それが先生なのだろう。

「でも、結局、私にはわからなかった……」

瞳から、涙が流れていく。

「私には、りさこの考えていたこと、やりたかったこと。見つけ出して、助けてやれなかった。こんなにも愛していたのに。こんなにも……。ああ、私はなんて愚鈍なのだろう。りさこのこと、知ってやれなかった。わかってやれなかった……」

彼は、悪くない。

りさこのために、りさこに何ができるか考えて。彼女の幸せを考えて……。え……。え……。

本当に、りさこのことを愛していたんだ。

「違いますよ。和藤先生。りさこは、きつと、和藤先生がわかってあげられなかったからなんかじゃない。彼女に残っていた心。それはきつと、和藤先生にもわかってはいるはず。だから、彼女は、何も言わずに一人で身を投げたのです」

「……桜木先生。これが、りさこの書いた小説です。最後までは書かれていませんが、あなたなら、わかるかも、しれません。どうか、りさこを……。わかってあげてください」

た。  
和藤先生の視点の先に、黄色い花と、一冊のノートが置いてあっ

## 拒絶

かしゅん、とフェンスが鳴く。

r字のフェンスが、私を拒絶した。

遠くに見えるのは繁華街。

真下に見えるのは山吹の花壇。

フェンスの切り取られた痕が今もまだ残っている。

どうして、りさこは、ここから飛び降りたのだろう。

普通の自分に違和感を覚えて。

普通の女の子がしているように恋をしてみたいと願った。

やがて、恋が見つかる。

でも、その恋は、ここでは禁忌とされている、先生と生徒の恋。

それでも、その恋を实らせたくて、体を重ねて。

しかし、結局、この恋を实らせることが出来なくて。

自暴自棄となり、飛び降りた。

りさこの小説から、そうしたことを読み取った。

でも。

やはり、どこか、違う。

そうした事柄でさえも、りさこが真実の心を隠すための道具として作ったとさえ思えてきてしまう。

どうして、そう思う??

『 恋愛によって誰かを信じたいのかも。それは、私も同じ』

『 先生は、私みたいな学生の頃、どんなことをされていたのですか？』

それは、自分を探しているという助けを求める声ではなかったか？

『 君を知っていくうちに、どこか作られているもののような感覚を覚えたんだ 』

そうだ。

違和感は、そこにあっただ。

何故、りさこは自分の心に違和感を持ったのか 。

それは、いつも、他人に、周りにいい人だと、優しい人だと思われて。

でも、そんな自分を省みて……。

自分を嫌いになっただ。

だから、そんな自分から逃げたくなって。自分を壊したくなって。自分がしなないと思われてる、恋を……、してみたくなった。

普通な女の子だったら、多分、そんなこと、よく考えるだろう。私も、りさこと同じくらいな年齢な頃、そんなことを思ったこともあった。

空を見上げた。

あの頃の自分の気持ちを思い出してみる。

私がおもし……、彼女だったら。同じ立場だったら。

辺りはなにもない広い空。

でも、周りにはフェンスが張られていて、その先には、飛べない。開放的な空間なのに、閉鎖的な息苦しさを覚える。

りさこも、これを見ていた……。

この景色を見て。

自分と、何処か似ている気がした。

皆に見られている自分と、隠している自分。

心の中の隠していた自分に、夢を持たせて。

隠していた自分が、夢を持ったまま一人歩きしていく。

心の均衡が次第に溶けて。溶けていくたび、現実の自分が壊れてゆく。

現実の自分のまま、一人歩きした自分を捕まえておくことができなくなっていく。

どちらを、選ぶ？

決まってる。

じゃあ、どうしたらいい？

どうしたら　。

空が、青い。

いつも、彼を求めてる私がいる。

いけないということは、わかる。

こうして、彼に抱かれて、彼を体の中から感じる　。

私も女の子なんだって、感じる。

彼に愛されている　。

それが、安心で、とても　。

幸せ。

でも、この幸せは。

私の、夢の中なの。

夢から覚めると　。

現実が、私を突き刺してくる。

私が、いつもの現実で生きていくには　。

嫌。

もう、そんなところに居たくない。

ずっと、ずっと、ずっと 夢の中で生きていけたら。

どうしたらいい？

「どうしたら、夢を覚まさないで生きていけるの？」

遠くに、山吹の花壇が見えた。

山吹。

咲いても、実らない。

私は、実を実らせたけど。

その実は、蒔いても、また花を咲かすことって、できないよね。

夢は、覚ましたくない。

ずっと、ずっと、ずっと。

今のままで。

りさこの、心が、解ったような気がした。

私の体が、ふわりと浮いて。

その心に、溶けていくようだった。

## 八重山吹

「時房さん！」

強く、肩を引かれた。

体が宙に浮いたように、ふわりと、見知った香りに包まれた。

「何してるんですか！」

「えっ……？ 道端、さん？」

気がつくと、フェンスの外で、彼に背中から抱きしめられていた。

「びっくりした……。時房さんまで、自殺しちゃうのかと……」

胸に回された腕に力が入っている。

男性の、腕……。

「時房さんが、死んじゃったら、僕は……」

今にも泣き出しそうな顔をして。

「そんなこと、するはずないだろうっ？」

「でも……」

私の髪が、風に攫われている。

「すまない。今、りさこの気持ちになって、何故、ここから飛び降りたのか、考えていた」

「そんな」

「りさこの気持ち、少しだけ、わかったような、気がする」

「え……？」

「時折……。人は外見と内面の二つの心を持っていることがある。外見とは、周りの人から見られたい姿。内面とは自分の心にいる姿。りさこは、その二つの相反するものに葛藤を憶えて、脱却しようとした」

「はい」

「でも、脱却するには……。こちらの、現実の世界を壊さないとだめだった。でも、彼女にはそれができない。現実の世界を壊してしまつたら、全てが、壊れてしまう……」

「そう、ですね」

「本当に、山吹の花だ。八重山吹だ」

「八重山吹？」

「八重咲きの山吹は、花は咲いても実を実らすことがない。古歌にも詠まれているこの花……。花とは恋の花。咲かせても、実らすことが出来ない。そう詠ったもの。きっと、彼女には、そう思えたのだらう」

「そんな」

「ただ……」

下を見て、遠くの景色を見た。

「一重に咲く山吹の花は、実をつけるんだ。だから、花壇に植えた山吹は、一重の山吹なんだ。何かすれば、きっと実になるんだって。風聞とかいろいろなことに惑わされずに、しっかりと生きて欲しい。私は、そう願って……」

「時房さん……」

「私のしたことは、間違っていたのだろうか」

「いいえ。そんなことはありません。現にあの子は実を成らせました。でも、ただ、自分に素直になれなかった。自分に向き合うことが出来なかった。それは、彼女が、周りに甘えることが出来なかったからなんですよ」

「甘える……、ことが」

「みんな、きつと、優しい彼女のためなら、優しくしてくれたはずです。それを信じられなかった。それが、彼女の、間違いだったのです」

周りを、信じられない。か。

だから、私も、こんな話し方になってしまった。

私も、彼女も、何も違わない。

「だから、時房さんも、周りを……僕を頼ってください」

「いいのか？」

「はい。もちろんです」

簡単に言うな……。

屈託のない笑顔で、私を見下ろしていた。

「ほら、いつまで抱きついているんだ」

「あつ！ えっ？ す、すみません！」

慌てて手をひっこめた。

「……道端さん」

「は、はい」

「あなたも心の中に、『道端一樹』という刑事と『オロチ丸』という青年としての二人がいるな」

「えっ？ そう、でしょうか」

「意図して使い分けているのだろう。あなたの、本当の心は、どっちにあるんだ？」

「決まっています。常に時房さんが見ているときの僕が……私です」

「素直じゃないな」

「えっ………?」

微笑んだ私を見て、顔が赤くなっている。  
もうしばらくは、彼に頼ろう。

「これから、生徒達に、りさこのこと、話しに行かないとな」

本当のりさこの心は、違つかもしれない。

でも、山吹のことを、話せる。

また……。あの黄色い花を。

『八重山吹』

終

## 八重山吹（後書き）

初めて書いた推理小説でしたが、いかがでしたでしょうか。最後まで読んで頂きまして、本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1173g/>

---

八重山吹

2010年10月9日02時08分発行